一

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（設問の都合上、一部手を加えてあります。）

私は「ねこ」と「人間」が共存する理想社会を考えるとき、どうしても＊相の島のノラネコたちの姿が頭のなかに浮かびます。島の路地裏で全く無防備な姿で、無邪気な顔をして眠りこけるノラネコたち。老ねこが、夕方の浜辺をゆっくりと歩く姿。母、娘そして祖母が1つのトロ箱の中でかたまって眠る姿。ノラネコたちは、人間の居住域に暮しながらも、あくまでもマイペースで、ゆったりと気ままに毎日を送っているように見えます。いつも何かにおびえている様子の、都市部のノラネコの姿とはどこか違って見えます。島のノラネコたちは、島の人が捨てた魚のあらなどの廃物を餌にしています。腐りやすい魚の廃物をノラネコがすぐに食べてくれるので、島の人も実は助かっています。しかし、都市部でよく見られるように、キャットフードなどをわざわざお金をだして買ってまでノラネコに与えるようなことは、島の人はしません。人間のお金は、人間の生活のために使うものだからです。島の人は、ノラネコと同じ集落のなかで、ともに暮らしながらも、「ひと」は「ひと」、「ねこ」は「ねこ」という程よい距離感をお互いに保ちながら生活しています。

島の魚の廃物の量には限りがありますので、その量でまかなえる以上にノラネコの数も増えることはありません。成ねこの体重もオスで約4キログラム、メスで約3キログラム程度です。もちろんこの体重では太り過ぎではありませんし、かといって痩せ過ぎているわけでもありません。オスもメスもとても締まった身体に見えます。多くのメスは年に1回、繁殖するのがやっとのようです。都市部でみられるように、栄養過多のノラネコのメスが次々と仔ねこを産んで、殺処分の対象になることもありません。島で仔ねこが生まれても、その多くが死んでしまいますが、若ねこまで死なずに生き残れたものが、①成ねこへの切符を手にします。飼い猫にくらべると厳しいようにも思えますが、これは多くの野生動物に共通している自然の掟です。海という大自然に命を預け、そこで魚を捕ることによって生活している島の漁師さんは、そのことをよく理解しています。ノラネコの生き死にや「ねこの生き方」にまで、手を出して関わることはしないのです。それは、ねこの理であって、②人間の理ではないからです。

木造船の時代には、島の人々にとってねこは、漁船に穴をあけるネズミを退治してくれる大切な存在でした。ネズミを退治する役割のなくなった現在でも、ねこは人間のそばにいる当たり前の存在として、島の人の生活のなかにとけ込んでいます。［　　］のような存在とでもいったほうがいいのでしょうか。島で生まれ育った人にとって、子供の頃からノラネコはいつもそばにいる存在でしたので、むしろまわりにノラネコのいない生活は考えられないのかもしれません。

ノラネコがたくさん住んでいる相の島でも、もちろん糞や尿の臭いや、ノラネコによる悪さがないわけではありませんし、発情期には夜通し続く発情オスの鳴き声によってあまり眠れなかったという話も調査中によく聞きました。しかし、島の人たちは③ノラネコを島から排除しようとはしません。また、年によっては大きな餌場などでは、多くの仔ねこが生まれることもあります。しかし、島の人が殺処分を行政にお願いしたという話を私は聞いたことがありません。

相の島の「ひと」と「ねこ」の社会は、昔の日本人の社会ともどこか似た点があるようにも思います。昔の日本人は今のように物にあふれた便利な生活をしていませんでした。高度成長期の前後まで、庶民の生活も質素で、毎日食べてゆくのがやっとの状態でした。そんな状況では、飼い猫にも特別に餌を用意することもなく、人間の残飯があればそれを与え、足りないぶんはネズミなどを捕まえるなどして、ねこは自分たちで食べ物を調達していました。もちろん、わざわざお金を使ってまで、ノラネコに餌を買い与えることなど、その時代には考えられなかったでしょう。また、地域の社会のなかでは隣人同士の関係を大切にし、ともに支え合いながら生活していました。④助け合いがなければ、生活してゆくことができなかったのです。私は3歳の頃までは兵庫県の西宮市に住んでおりました。両親が共働きでしたので、忙しい時には近所の商店街のお米屋さんや八百屋さんの中年夫婦が私を預かってくれて、ご飯を食べさせてくれたり、お風呂にも入れてもらっていました。親戚でもなんでもありません、近所の若い夫婦（私の両親）が大変そうだったので、単にご好意から私の両親を支えてくれていただけなのです。このような地域社会で住民どうしが支え合う光景は、一昔前の日本のどこにでも見られたのではないでしょうか。そのような社会では、隣人のことを常に思いやって生活していますので、ご近所の迷惑になるようなことは慎んでいたでしょうし、逆に多少のことは気にも止めずに、お互いに許し合っていたのだと思います。このような、物質的には豊かではなくとも、助け合いによって成り立っている一昔前の社会では、現在のようなねこに関する行政への苦情もなく、ノラネコも増えることもなく、殺処分する必要もなかったでしょう。また、過剰な餌やりによって寂しさをまぎらわすような、孤独な高齢者もいなかったのではないでしょうか。

私は相の島でみられる「ひと」と「ねこ」の暮らしや、一昔前の日本の社会のなかに、現在、都市部で頻発するねこの

苦情や過剰な餌やり、そして殺処分等の問題解決の糸口が、さらには社会のなかでの「ひと」と「ねこ」との自然な共存のあり方についてのヒントがあるように思えます。そうはいっても、島の生活環境や生活習慣は、都市部とはあまりに違いすぎていて、そのまま当てはめて考えることはできません。また、現在の物質的に豊かで便利な生活から、一昔前の日本の生活に逆戻りすることもできません。しかし、相の島のように「ひと」と「ねこ」がお互いの存在を認めながらも、程よい距離を保ちながら共存することは不可能ではないと思います。また、一昔前の日本のように、地域の住民がお互いを思いやり、支え合う社会に戻ることも、少し時間はかかるかもしれませんが、それほど難しいことではないのではないでしょうか。⑤日本人がほんの少し前まで、大切にしてきた生活習慣だからです。

現在の物に恵まれて便利な世の中では、お金さえあれば快適で自由な生活を満喫できます。しかし一方では、地域の住民との接触がなくても生活できますから、どうしても自分中心にものを考えがちで、⑥近隣の住民への配慮や許容性もなくなってきます。また、人の接触が希薄な地域社会では、孤独な人や寂しい日々を送る高齢者も増えるでしょう。そんな高齢者に声をかけてくれていた商店街も、街のなかから消えつつあります。そしてこれらの状況が、ねこをめぐる様々な問題を生み出す原因となっているように思えます。昔のような貧しく不便な生活に戻る必要はありませんが、お互いが支え合い、思いやる社会を取り戻すことができれば、「ひと」だけでなく、「ねこ」にとっても暮らしやすい社会、そして⑦両者が仲良く共存できる社会が実現できるのではないでしょうか。私はそう思っています。

⑧「ねこ」の問題を考えるとき、それは「ひと」の社会全体のありかたを考え直さなくては、解決できないと思います。それは、「ねこ」そのものは、1万年の昔からほとんど何も変わってはいないからです。そして、大きく変わったのは、わたしたち「ひと」のほうだからです。

＊相の島……福岡県にある島。

山根明弘『ねこの秘密』（文春新書）による

問一 本文中の［　　］に入れるのに最も適切な語を、次の中から選び記号で答えなさい。

ア 自然　　イ 大海　　ウ 空気　　エ 住民

問二 ――線①「成ねこへの切符を手にします。」とは、どういうことを言っているのですか。十五字以上、二十字以内で説明しなさい。

問三 ――線②「人間の理」とありますが、これを表す例といえる部分を、これより前の本文中から二十字で抜き出し、その始めと終わりの五文字を記しなさい。

問四 ――線③「ノラネコを島から排除しようとはしません。」とありますが、なぜだと考えられますか。次の説明文の［　　］に入れるのにふさわしい語句をこれより前の本文中から四文字で抜き出して答えなさい。

「ひと」も「ねこ」もともに［　　］に従って生きていると考えるから。

問五 ――線④「助け合いがなければ、生活してゆくことができなかった」とありますが、それはなぜですか。本文中の言葉を使い、二十五字以内で答えなさい。

問六 ――線⑤「日本人がほんの少し前まで、大切にしてきた生活習慣」とはどのようなことですか。本文中の言葉を使い、二十五字以内で答えなさい。

問七 ――線⑥「近隣の住民への配慮や許容性」とありますが、実際にはどのようにすることですか。本文中の語句を使い、四十字以上、五十字以内で説明しなさい。

問八 ――線⑦「両者が仲良く共存できる社会」の実現に必要なものを二つ、本文中の四文字の語で答えなさい。

問九　――線⑧「『ねこ』の問題」について、筆者は「ひと」の社会全体のありかたが原因だと考えています。その原因と言えるものを二つ、自分の言葉で十字以内で答えなさい。

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（設問の都合上、一部手を加えてあります。）

「なんか今日、元気ないね？」

わたしのノートを点検しながら、＊美和ちゃんは言った。

「遊園地で疲れちゃった？」

美和ちゃんに言われるまでもなく、自分がひどい顔をしているのは知っていた。ちっともパワーがわいてこない、その原因ははっきりしている。富田くんと、もう三日も口をきいていない。

遊園地に行った次の日の放課後も、わたしたちはいつものように＊アトリエに寄り道した。すっかりおなじみになった近所の公園のベンチには、やわらかい陽ざしがふりそそいでいる。並んでパンをかじっていると、すずめが何羽か寄ってきて、せわしなくパンくずをつつき始めた。

「遊園地、楽しかったね」

わたしが言うと、うんうん、と富田くんもうなずいた。

「美和さんも＊村上さんも、いい感じだったし」

パンが口いっぱいに入っているので、みあはんもむらはみはんも、と聞こえる。口をもぐもぐさせる足元のすずめと富田くんの横顔を見比べて、わたしは思わず笑ってしまった。

「いい感じだよね、ほんと」

わたしも心から同意する。美和ちゃんと村上さんの組み合わせは、絶妙だと思う。わたしたちもあのふたりみたいになれたらいいね、と言いたかったけれど、恥ずかしくなって、わざと違うことを言った。

「……やっぱりいいね、大学生って」

「あの車！　バイトでお金ためて買ったんだって。いいよなあ……」

どうやら富田くんがうらやましかったのは、そこらしい。①わたしは少しがっかりしたような、でも逆に安心したよう

な、ちょっと複雑な気持ちになる。
わたしたちが大学生になったら、どんなふうだろう。一緒に地元の大学に進んで、今みたいにちょくちょくパンを食べに行けたらいいのに。あ、でも、もし東京に出るとしたら、有名なお店を食べ歩けるかも。美和ちゃんがいつも自慢しているように、大学生は平日の昼間に出歩けるから、お昼に焼きたてのパンを買える。そうだ、自由な時間が増えるだろうから、パン屋さんでバイトもしたい。わたしたちもっと長く一緒にいたら、美和ちゃんと村上さんのようにすてきなカップルになれるだろうか……つきあってもいないのに、最近わたしの想像力がよく暴走するのは、美和ちゃんや＊聡子にけしかけられているせいかもしれない。
つらつらと考えながら隣の富田くんをうかがうと、早くもふたつめのパンにとりかかっている。
「富田くんは、大学に入ったらなにがしたい？」
何気なく聞いたのは、自然ななりゆきだったと思う。文系なのか理系なのか、志望の大学はもう決まっているのか、そんな内容を予想していたから、返ってきた答えを聞いてびっくりした。
「あ、おれ、大学は行かないかも」
富田くんは、あっさりとそう言った。
「フランスにパンの修業に行きたいんだ」
別にあの店を継ぎたいとかっていうんじゃないけど、やっぱり本場を見てみたいっていうのがあるんだよなあ。
「親父の知り合いもけっこういるみたいだし」
そうだよね、とわたしはぼんやりとあいづちをうつ。富田くんの想像する未来に、わたしはいない。ついさっきまでの楽しい想像は一瞬でふきとび、ばかみたい、とわたしは心の中でつぶやいた。ひとりで舞い上がっちゃって、ばかみたい。
「どこがいいのかな、やっぱりパリかな？」
富田くんが悪いわけじゃない。でも、目をきらきらさせながら将来の計画を語る富田くんを、わたしは少し恨んだ。そんなにも期待に満ちた、楽しそうな顔することはないのに。
「行きたい大学とかもう決めてるの？」

1 他人ごとのような聞きかただ。まあ、他人ですけど。最初のショックが過ぎると、②わたしは投げやりな気持ちになってきた。
「ううん、でもとりあえずどこかに入って、いっぱい遊ぶ」
「ふうん」
一応話を続けながらも、富田くんはパンの袋をがさごそと探り、
「お、新作だ」
なんて言う。
「ちょっと味見する？」
すでにパンのほうにすっかり気をとられている様子なのが、しゃくにさわった。
「富田くんも大学くらいは出といたほうがいいんじゃないの？」
自分の声がとがっているのがわかった。
「うーん、でもやりたいこともないのに適当に大学入ってもなあ」
富田くんは、のんびりと首をかしげている。
「あんまり夢みがちなのも大変だよ？」
われながら、意地悪な言いかたになった。③本当はこんなことを言いたいんじゃないのに、言葉が勝手にこぼれてしまう。富田くんが、びっくりしたようにこっちを見た。
「どうしたの？」
別に、と返したけれど、もう遅かった。空気が変にゆがんでしまっている。④富田くんは不意に立ち上がり、少し離れたゴミ箱に勢いよくアトリエの紙袋を投げ捨てた。ぱこん、と乾いた音がする。
「別におれ、夢みてるつもりじゃないんだけどなー」
「そういう意味で言ったんじゃないよ」
否定したものの、あまり心がこもっているようには響かなかった。

こういうとき、一体どうやって場をフォローしたらいいのだろう。たとえば＊早紀なら、さびしいよー行かないで、と冗談めかして言うだろう。[2]美和ちゃんなら、わたしも一緒に行きたい、と真顔で身を乗り出すかもしれない。でもわたしは、なにも気のきいたことを言えずに、ただ黙って自分の靴を見つめることしかできなかった。耳が熱くなっている。

「でもさ、なんの目的もなく大学に行っても、お金と時間のむだだと思う」

いつになく、富田くんもむきになっているみたいだった。

「おれは興味ないな、お気楽大学生なんて」

ここで、まだまだ先の話だよね、とか笑って、そのまま会話を終わらせてしまったほうがよかったのだろう。[3]、暗に美和ちゃんたちをけなされた気がして、わたしはかちんときた。

「大学生がみんなそうだってわけじゃないよ」

⑤思いのほか、強い口調になった。

「まあ、そうだけど」

富田くんが皮肉っぽく肩をすくめる。こんなに感じの悪い富田くんを見るのは初めてで、わたしもつられて攻撃的になった。

「だいたい、早く社会に出るのがそんなにえらいかなあ」

決定打をうってしまった、手ごたえがあった。

「えらいなんて誰も言ってないじゃん」

富田くんが思いきり不機嫌な声を出す。

「……帰ろうか」

いつのまにか日が暮れて、公園には街灯がともっていた。すずめも姿を消している。⑥薄闇の中で、富田くんの表情はもうよく見えなかった。

瀧羽麻子『うさぎパン』（幻冬舎文庫）による

＊美和ちゃん……「わたし」の家庭教師をしている大学生。
＊アトリエ……富田くんの父が営むパン屋さん。
＊村上さん……美和の恋人。
＊聡子……「わたし」の母の幽霊。時々美和の体を借りて「わたし」と話をする。
＊早紀……「わたし」の友達。

問一 [1]～[3]にあてはまる語を次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア まるで　**イ** でも　**ウ** たとえば

問二 ――線①「わたしは少しがっかりしたような、でも逆に安心したような、ちょっと複雑な気持ちになる。」とありますが、なぜですか。七十字以内で説明しなさい。

問三 ――線②「わたしは投げやりな気持ちになってきた。」とありますが、この時の「わたし」の気持ちとして最も適切なものを、次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 自分と同じ地元の大学へ進学するのが当然だと思っていたのに、かなうはずもない夢を語る富田くんに心底がっかりしている。

イ 富田くんの将来の話の中に自分の存在が感じられず、二人の未来を描いていた自分との温度差を感じ、ふてくされている。

ウ 遠回しに一緒にフランスに来てほしいと言われていることに気づき、はっきり言ってこない富田くんのずるさを責めている。

エ 富田くんが勝手にフランス行きを決めたので、大学進学の夢が絶たれ、これまで勉強してきた時間が無駄になったと感じている。

問四　――線③「本当はこんなことを言いたいんじゃないのに」とありますが、「本当に言いたかったこと」とはどんなことだと考えられますか。最も適切なものを、次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア　パンのことよりも私のことをもっと考えてほしい。

イ　パン職人になるよりきちんとした大学に進んでほしい。

ウ　お金に困らず生活できるような仕事を選んでほしい。

エ　村上さんと同じ車を買うためにアルバイトしてほしい。

問五　――線④「富田くんは不意に立ち上がり、少し離れたゴミ箱に勢いよくアトリエの紙袋を投げ捨てた。」とありますが、この時の「富田くん」の気持ちについて、「真剣・否定」の二語を必ず用いて、六十字以内で説明しなさい。

問六　――線⑤「思いのほか、強い口調になった。」とありますが、なぜですか。二十字以内で答えなさい。

問七　――線⑥「薄闇の中で、富田くんの表情はもうよく見えなかった。」とありますが、この時の「富田くん」はどのような様子だったと考えられますか。本文中から三文字で抜き出して答えなさい。

問八　本文の表現について述べたものとして最も適切なものを、次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア　「すずめ」は「わたし」と「富田くん」の関係を悪化させるために登場しており、二人をけんかさせた後は役目を果たしたのでいなくなっている。

イ　「想像力がよく暴走する」という表現は、物事を自分に都合のいいように解釈し、それを相手に押し付ける「わたし」のわがままさを強調している。

ウ　「他人ごとのような聞きかただ」という表現によって、「富田くん」はパンにしか興味がなく、最初から「わたし」を相手にしていなかったことがわかる。

エ　「いつのまにか日が暮れて、公園には街灯がともっていた」は、時間が経過したことを示すと同時に、二人の関係が悪化してしまったことを象徴している。

三

次の各問いに答えなさい。

問一 次の――線の漢字はひらがなで書き、カタカナは漢字に直して書きなさい。

① こんなときに電子辞書があれば重宝なのだが。
② 彼女の話を聞いて、望郷の思いがあふれてきた。
③ ひとりでキオっていると疲れてしまうよ。
④ クラスのみんながブンサンしてごみ拾いをする。

問二 次の意味になる四字熟語を、あとの漢字群の漢字を組み合わせて、それぞれ書きなさい。

① 見かけの違いでごまかしても結果は同じだということのたとえ。
② しっかりした考えもなく、ただ他人の意見に従うこと。

朝	雷	今	断	三	優	付	不
自	暮	和	同	恥	柔	四	

問三 次の言葉について、（　　）の指示にあてはまる言葉をあとの語群から選び、漢字に直して答えなさい。

① 正式（類義語）
② 史実（対義語）

せいかく	きろく	ほんかく	しょうせつ	しょうりゃく	でんき

問四 次の文中の□にあてはまる表現をあとから選び、記号で答えなさい。

・友だちのふるまいを見て□のはよくないことだ。

ア 目をむく　イ 目に物を言わせる　ウ 目くじらを立てる　エ 目に余る

問五 次のことわざ・慣用句・故事成語の□に適切な動物名を入れるとき、十二支にふくまれない動物の入るものが一つあります。その記号を答えなさい。

ア □の尾を踏む
イ □の尻笑い
ウ □の遠ぼえ
エ □の甲より年の功
オ □の耳に念仏

平成二十九年度 第一回

国語解答用紙

受験番号

座席番号

氏　名

得　点

一

問一

問二

問三　始　～　終

問四

問五　25　25

問六　25

問七　50　30　10　40　20

問八　一つ目　二つ目

問九　一つ目　二つ目　10　10

二

問一　1　2　3

問二　70　50　30　10　60　40　20

問三

問四

問五　10　50　30　10　20　60　40　20

問六

問七

問八

三

問一　①　②　③　④

問二　①　②

問三

問四

問五

平成29年度　本庄東高等学校附属中学校（国語）　解答・解説

解答

一

問一　エ
問二　成ねこになるまで生きのびられること。
問三　海という大　～　で魚を捕る
問四　自然の掟
問五　昔は、物にあふれた便利な生活ではなかったから。
問六　地域の住民がお互いを思いやり、支え合っていたこと。
問七　自分中心にものを考えるのではなく、地域の住民との接触を持ち、孤独な人や高齢者に声をかけたりすること。
問八　一つ目　思いやり
　　二つ目　支え合い
問九　一つ目　便利で自由な生活
　　二つ目　人の接触が希薄な社会

二

問一　1　ア　2　ウ　3　イ
問二　大学生より彼らの持つ車の方に富田くんの関心があることにがっかりしたが、それでも富田くんが少しは大学生活に興味を持っているとも感じたから。
問三　イ
問四　ア
問五　真剣にパン職人になろうと決心しているのに、将来の夢を否定されるようなことを言われて、困惑といらだちを感じている。
問六　美和ちゃんたちをけなされ腹が立ったから。
問七　不機嫌
問八　エ

三

問一　①　ちょうほう　②　ぼうきょう　③　気負〔って〕　④　分散
問二　①　朝三暮四　②　付和雷同
問三　①　本格　②　小説
問四　ウ
問五　エ

解説

一

問九　一つ前の段落で、「現在の物に恵まれて便利な世の中では、お金さえあれば快適で自由な生活を満喫でき」、「人の接触が希薄な地域社会」が、「ねこをめぐる様々な問題を生み出す原因となっているように思えます。」と述べられています。

二

問五　真剣にパン職人になろうと思い、フランスに修行に行こうと考えているのに、「夢みがち」だと意地悪な言い方をされ、富田くんが将来の夢を否定されたように思って不機嫌になっていく様子が描かれています。